

『檸檬』 作…ポチ子

店員 「お待たせしやしたー、こちら唐揚げになりまーす」

男 「ああ、すみません」

男、唐揚げに檸檬をかける

女 「唐揚げに檸檬、かける派？」

男 「え、あ、うん。ごめん、かけない人だった？」

女 「いや、私もかける派だけど。」

男 「そう、なら良かった。」

女 「・・・唐揚げに最初に檸檬かけようって思った人ってなんなんだろうね。」

男 「え？」

女 「唐揚げなんていう油っぽいもの頼みながら、口の中はすすきりさせたいなんて傲慢よね。散々食べるときながら、トクホのお茶を飲む人もしかり。」

男 「まあ、そうだね。」

女 「すすきりさせたいなら、最初から食べなければいいと思わない？」

男 「うーん、唐揚げはおいしいからね、食べたかったんじゃないかな。」

女 「そういうものかしら」

男 「そういうものなんじゃない、多分」

問

女 「・・・騒がしいわね。」

男 「まあ、居酒屋だから。」

女 「私と話してて楽しい？」

男 「え？」

女 「マッチングアプリで知り合った女が、こんな不愛想で面倒くさいやつだなんて、あなたも災難ね。」

男 「はは、そうかもしれないね。」

女 「別に途中で帰ったっていいのよ。」

男 「うん、そうだね。」

黙々と唐揚げを食べる二人

女 「あなたって、人畜無害そうな顔しといて、意外と変わり者ね。」

男 「そうかな？」

女 「さつきだって声もかけずに、檸檬かけてたじゃない。普通は、かけていいか確認するものでしょ。」

男 「それは悪かったよ、今度からそうする。」

女 「それに、私とこうやって話してる。大体の男は、トイレに行
ったきり帰ってこないわ。」

男 「ははは・・・」

女 「帰る。」

男 「え？今？」

女 「ええ。」

男 「そう・・・それじゃあ、送っていくよ。」

女 「別に一人で帰れるわ。」

男 「そう、そうだよね。それじゃあ、今日はここで。」

立ち去ろうとする女

男 「また、今度。」

女 「・・・ええ。」

— 終わり —